

オミクロン株の影響による感染拡大を受けて 現時点での知見と大学としての対応をご説明します

オミクロン株の影響により、全国的に急速な感染拡大が続いています。不安に感じる学生や保護者の皆さまも多いと思いますので、現時点での知見と大学としての対応をご説明します。

ここまで感染拡大が進んでいるならば、すべて遠隔授業にするという選択肢もありますか。

統括学校医・本学では以前から人口あたり感染者数を主要指標としており、これをもとに**1月17日付けで対面授業制限レベルを「レベル3」としました。**これにより密接を伴う演習や課外活動を減らし、学内での感染リスクを低減させています。現時点では重症者向け病床が満床になる状況ではないので、国や自治体では社会生活の維持もある程度可能と判断しています。その間は現在の対面授業制限レベルを継続できると考えています。

オミクロン株では、軽症者が多いと聞きます。今までよりリスクが低いのでしょうか。

統括学校医・そうは言えませんが、無症候の感染者が多いと、日常生活を送りながら感染を拡げることが多ければ当然ながら重症者も増えます。リスクは影響度と発症確率の掛け算で求めるもので、現況は低リスクではありません。

感染者や濃厚接触者の「自宅待機日数」を短縮する」という報道がありました。出席停止など学業への影響もありますか。

統括学校医・国立感染症研究所の暫定報告によると、オミクロン株に感染した患者の潜伏期間の中央値は3日弱とされています(図1)。

また、同研究所が1月27日に公表した報告では、感染者からウイルス分離可能な症例は診断6日目以降は減少し、診断8日目以降は認めなかったとしています(図2)。

国ではこの暫定結果などを参考に自宅待機日数を短縮することも可としています。ただし大学は集団生活の場ですから、右を踏まえても慎重な対応が必要です。感染経緯や症状にもよりますが、短縮しても**潜伏日数3日+診断後日数7日=約10日程の出席停止**はやむを得ません。なお、感染症法に基づき保健所が行う自宅療養や待機の指示と、学校保健安全法に基づいて学長が行う出席停止の措置は、それぞれ趣旨が異なります。国立感染症研究所の報告にも、**陰性の結果が検体採取時の感染者体内に感染性ウイルスが存在しないことを必ずしも保証するものではない**と明記されており、PCRの陰性を根拠にした安易な短縮も避けています。今後国内外の知見を集め、学内の感染拡大防止に努めていきます。

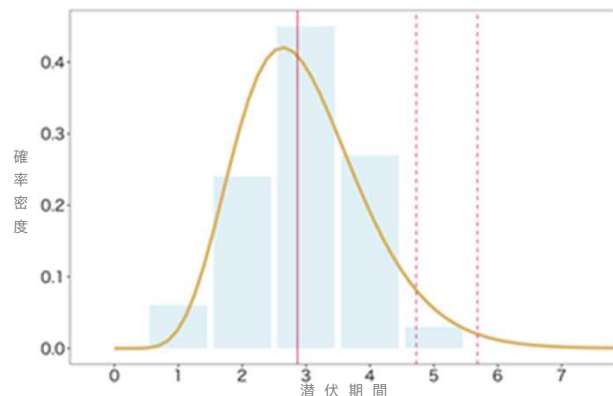


図1 積極的疫学調査のデータを用いた潜伏期間の分布
(国立感染症研究所ホームページ
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/2019-ncov/2551-cepr/10903-b11529-period.html>)

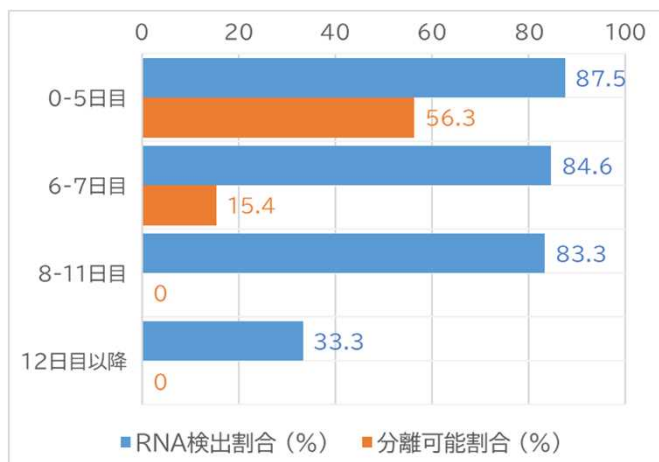


図2. 無症候者のオミクロン株症例におけるウイルスRNA検出割合と分離可能割合
(国立感染症研究所ホームページのデータをもとに、本学COVID-19対策本部でグラフ作成
<https://www.niid.go.jp/niid/ja/2019-ncov/2484-idsc/10942-covid19-70.html>)

オンライン方式による定期試験の注意点

本学では、定期試験の方法として従来からの対面方式に加えて、科目担当教員の判断によってオンライン方式も実施できることとしています。オンライン方式には概ね次の特徴があります(科目によって委細は異なります)。

■学生ごとに問題が異なります

教員は多数の問題をLMSに登録します。その中からランダムで出題されますので、学生ごとに問題が異なる問題が異なります。

■受験回数・時間・日時にご注意を

教員はLMSに受験できる回数・時間・日時を設定します。実行回数が1回の場合、試験中断を防ぐため安定した通信環境で受験しましょう。また、時間と日時はよく確認して

後期定期試験

- 実行回数 (1回まで)
- 制限時間 (60分)
- 利用可能時間
[2022/02/01 13:00~
2022/02/01 14:30]

13:00開始の場合
⇒「制限時間60分」のため14:00終了

14:00開始の場合
⇒「利用14:30まで」のため14:30終了

ください。制限時間内でも利用可能時間を経過すると試験終了になりますので、対面と同様に遅刻に注意しましょう(右図)。皆さんの力が存分に発揮されることを願っています。

学生の皆さんの意見
や提案を歓迎します。

